

「鎌倉街道」と東国社会

鎌倉幕府と交通路の整備

源頼朝は、鎌倉幕府を開いた直後、一一八五（文治元）年に「駅路の法」を定めて以来、一一九四（建久五）年には「新宿」の増加につき駅（宿）の整備をするなど、鎌倉を経由して西に延びる東海道（東海道）の整備をすすめます（吾妻鏡）。東国に新しくできた「武家の都」と、政治の中心である京をつなぐ街道が、将来重要になることを見越した措置といえるでしょう。事実、東海道にはその後多くの文物が往来し、朝廷と幕府を結んでその後の東西の文化的・政治的交流を促す大動脈としての役割を果たしていきます。

この東海道の整備と同時に、頼朝はのちに「鎌倉街道」と称される、鎌倉から北に延びるいくつかの道の整備をすすめていったとみられます。しかし、その過程は記録に残っていません。この道は、平安時代の武蔵武士たちが南関東をしげく往来する際に頻りに利用した道として、次第に形作られていったものとみられます。

「鎌倉街道」三つのルート

鎌倉から延びる道は、当時は「鎌倉大道」と呼ばれたようです。鎌倉滅亡の顛末を描く『太平記』や『梅松論』によれば、「上路（道）」、「武蔵路」、「中道」、「下道（下の道）」と三つのルートが鎌倉時代までに形成されていました。まず「上路」は「武蔵路」と称されるように、武蔵国を南北に貫通して上野・信濃国方面へと至る道で、基幹幹線といつてよい道です。このルートは、鎌倉から武蔵府中を経て久米川付近までは、古代の東山道武蔵路にそってありますが、その後北西に進路を変えて笛吹峠から児玉を経て上野国へ至ります。図5-1でふれた『宴曲抄』のルートはこれにあたるわけです。

一方、「中道」は中野・岩槻を経て、古河・宇都宮から陸奥への道である「奥大道」に接続する道です。また「下道」は、東京湾岸の古東海道のルートをすすみ、浅草から隅田川の対岸を経て常陸国に向かう道であり、太平洋湾岸を経て白河の関へ向かう道に接続していると理解されています。

鎌倉街道の主要なルートは「上路」で、最近

5-3 鎌倉街道図



めざまざまな史跡が点在しています。多摩川を渡った府中市にも、鎌倉軍と新田軍が戦った分倍河原合戦の史跡がたくさん確認できます。また、国分寺市には、わずかながら往時を偲ばせる「鎌倉街道」の痕跡がうかがえます。国分尼寺の北側の黒鐘公園北にあり、薬研堀のように

V字型をした切通しがそれで、祥応寺という寺院の跡や塚なども点在しています。一方、「中道」「下道」もまた、東京都下を通過する幹線でした。さきに述べたように、「中道」は「奥大道」に接続する道ですが、鎌倉から東京に至るル

の研究成果では、平安後期に武蔵国に勢力を張った秩父平氏の動向が重視されています。一一五五（久寿二）年、児玉党に擁立され、上野方面から武蔵に進出してきた木曾義仲の父源義賢と、頼朝の兄で、秩父重隆に擁立された義平がおおくらやめた大蔵館付近で激突した「大蔵合戦」は、まさに武蔵国の覇権を争う豪族武士団の去就を左右するものでした。すでにこの時期には「上路」の原型が存在しており、そのルート上で起こった争いであったといわれています。また、秩父重隆の大蔵館は、のちに「上路」の宿の一つとなる「大蔵宿」に隣接する武士の館であったとされています。

東京を通過する「鎌倉街道」

「鎌倉街道」は、武士の拠点を縫うように成立した可能性が高く、政治的な役割が顕著であったこととなります。しかし一方で、有力な秩父平氏の一族、川越氏の本拠地をさけて設定されているなど、まだ考えなければならぬ問題は山積しています。

多摩から府中を抜ける「上路」が、西東京にとつて重要なことはいまでもありません。多摩市関戸は、鎌倉末期に鎌倉軍と新田義貞の軍が死闘をくりひろげた「関戸合戦」の舞台であり、「安保入道の墓」「横溝八郎の墓」をはじめ

トはよくわかっていません。しかし赤羽から岩淵に抜けて、入間川（荒川）を渡河して「奥大道」に接続することは間違いないといわれています。渡河地点の岩淵宿は「とわずがたり」の主人公、後深草院二条が一二八九（正応二）年に通過した場所で、遊女がたむろする賑わったところでした。対岸である川口には新善光寺が建立されるように、文字どおり交通の要衝でした。また一二五六（建長八）年、幕府は奥大道の治安維持を街道付近に拠点をもつ地頭御家人に通過しており、御家人らがこのルートの道の警固やメンテナンスを請け負っていたことがわかります。

東京都下では北区の「十条久保遺跡」から、道の痕跡が見つかっており、これが「中道」の一部であることは間違いないようです。

また「下道」は、荏原郡にあった国衙領「六郷保」（現在の多摩川河口左岸域）から大井郷（現在の品川区大井）を抜け、桜田郷（皇居桜田門橋一帯）・江戸郷（現在の千代田区大手町付近）を経由し、千束郷（現在の浅草を中心とする一帯）の浅草・石浜に至るルートです。これは武蔵国の豪族である江戸氏の支配領域を貫通するものでした。このようにみると、東京都下を通過する「鎌倉街道」は、江戸氏の影響下にあったことが明らかとなります。